

交流会

【Room 2】 12 : 20～13 : 20

医療現場の多文化共生 外国人看護師と一緒に働く

華 靖（東京医科歯科大学大学院）

王 聡聡（東京医科歯科大学大学院）

ガンチュルーン・サンブー（東京医科歯科大学大学院）

交流会

医療現場の多文化共生 外国人看護師と一緒に働く

華 靖（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・国際看護開発学分野）

世界的には、看護師不足という現状があります。厚生労働省の2016年の推計によって看護人材の不足では約13万人とされており、または、未来に向けて国際な看護を提供するために、柔軟に対応できる看護人材が求められています。看護分野においても外国人の雇用は人材確保対策の一つです。急速に国際化が進む日本の医療現場では、来日外国人や多文化を背景に持つ人々の年々増加により、外国人看護師は医療保健分野における異文化理解推進のキーパーソンとして期待されています。

今こそ、「医療現場での多文化共生」が求められている時代です。今回の交流会では中国とモンゴル出身の看護師の方に日本の臨床現場での活躍経験をお話いただきます。外国人看護師たちの来日の経緯、現場での活動の内容、日本人の同僚との交流などを通して気づいた点をお話ししてくださいませ。今回、国際的な看護に関心を持つ参加者同士で意見交換を行うことで方々の知見を広げ、現場教育や研究活動の発展を期待しています。

プログラム：

- 交流会の趣旨説明 （10分程度）
- 2名の外国人看護師に日本医療現場の活躍についての発表（各15～20分程度）
その内容を踏まえ参加者同士で意見交換（各10～15分程度）
- まとめ （5分程度）

中国出身の看護師が日本で働く経験

王 聡聡（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・国際看護開発学分野）

【日本の看護師になるまで】

筆者は大学より卒業後、日本語学校を通して日本の病院で看護師として働くプログラムがあるとの説明あった。留学する予定であったが、先に就職すると現場の勉強ができ、経済にも余裕があると考えが変わった。大学卒業後に来日し、看護師国家試験のため1年間日本語学校を通った。看護師免許を取った後に日本語学校が紹介された病院で働き始めた。

【病院に入ってから】

外国人職員0人の病院に入っていたため日本人の新卒看護師と同じ教育・成長目標を受けた。仕事の状況を確認されながらステップアップしていた。

1年目は主に日本語環境を含め現場を慣れながら各勤務が1人でできるようになった。2年目は主に担当患者など事例や問題点の対応ができるようになった。3年目は主に病院の係りやリーダーができるようになった。4年、5年目は主にプリセプターなど後輩の指導ができるようになった。

【難しいところ】

日本看護師免許を得るまで一番難しいところは、厚生労働省で試験を申し込むことである。当面で何回もやりとりをするため日本に在留する必要がある。資料申請が非常に厳しいため、帰国して大学とのやりとりをするなど繰り返す作業が必要であった。

仕事で一番難しいところは、コミュニケーションである。教科書に書いている日本語を使わない場面が多いため病院に入った直後、日常会話や医療用語を含めコミュニケーションが取れない場面が多い。それに、日本人のように空気を読むなど言葉なくても交流できる能力がないため患者の本当の情報を取れない場面もある。

コミュニケーション以外、中国と日本の看護の違うところがある。看護師の仕事内容から違っているため、日本看護の知識や技術・考え方から学ぶ必要がある。

【良いところ】

- ・患者-医療者関係が良い。患者・家族から信頼されているため適切な看護を提供しやすい。
- ・マニュアルが充実している。新しいことでも迷わず対応できる。
- ・看護師の仕事が見つけやすい。看護師を募集する機関が多い、より自分に合う仕事が見つかる。
- ・チームワークで他職種の専門性を持つ。共有した目標に向け、質の高いチーム医療を実現できる。
- ・研修機会を多い。院内研修はもちろん、院外研修もたくさんあるため勉強する機会が充実している。
- ・相談しやすい。同期や同僚以外、上司や他職種と相談しやすい環境になっているためより質良い看護ができる。

日本で看護師として勤務した三年間を振り返る

ガンチュルーン・サンブー

(東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・国際看護開発学分野)

筆者は 1990 年にモンゴル・フブスケル県・ラシアント村で一家の長女として生まれた。そして、村の高校を卒業した後に、18 歳の時にモンゴル健康科学大学の看護学校に入学した。

看護学校の 2 年時にモンゴルの医療と看護の発展に貢献することを目的とする「モンゴル看護師育成支援プロジェクト」のことを知った。医療が発展している日本で看護を学びたいと思い、プロジェクトの第一期生として 2010 年 11 月に来日した。そして、日本語学校で日本語を学び、2012 年 3 月に卒業した。

そして、同年 4 月から看護専門学校で看護を学び、2015 年 3 月に看護学校を卒業した。その 4 月から看護学校の系列病院で 3 年間看護師として勤務した。

働き始めたころはかなり不安な気持ちがあったが、患者さんから「看護師さん」と呼ばれるととても嬉しかった。一方で、仕事で覚えることが多く、看護師の仕事の大変さを実感し、落ち込んだ時期もあった。そんな時に支えてくれたのは同期の看護師たちだった。仕事で悩んだ時は気持ちを打ち明け、みんなに励まされていた。

特に、筆者は看護記録を書くことが苦手だった。書きたい内容を日本語で表現することが難しく、苦戦したのを覚えている。その時は師長さんをはじめ、同僚のみんなが看護記録の書き方を教えてくれた。そして、徐々に記録も書けるようになり、それが自信になった。

筆者には言葉の壁があったが、同時に文化の違いを感じることもあった。職場での人間関係で筆者にとっては重要ではないことが、相手にとっては非常に重要で、またその逆もあり戸惑う場面があった。例えば、自分の仕事が終わっても先輩の仕事が終わっていなければ、先に帰れないことがあった。最初は大変だったが、人間関係に慣れてくると互いに協力することの大切さを感じた。

患者さんとのコミュニケーションでは、それほど困ったことがなかった。モンゴルから来日したことを患者さんに伝えると色々話題が増え、互いに理解が進んだことがあった。そして、患者さんから応援の言葉をいただき、看護師になってよかったと思った。

看護師として勤務している間は病院の職員寮に住んでいた。そして、就労ビザの手続きなども病院が対応してくれた。仕事以外の生活面で十分にサポートしてくれた。日本で看護師として勤務した三年は多くのことを学び、成長した時間だった。そして、本当に多くの方々に支えられたことを感謝している。

日本はこれから外国人看護師を受け入れるには病院側はいくつかの柔軟な対応が必要ではないかと思う。その一つは、外国人看護師たちは様々な理由で一時帰国しなければならないときはあるでしょう。有給休暇をまとめて取得できる制度づくりや場合によってそのための特別休暇を設けるなどの対応が必要であると考えます。

また、病院の管理職だけでなく、スタッフたちにも外国人看護師国人を受け入れる準備が必要であると思う。外国人看護師というだけで仕事ができるのかという態度が取られ、そのような発言を耳にすると、仕事へのモチベーションが低下するでしょう。外国人看護師も日本人のスタッフと同じように受け入れ、共に働くより良い環境作りが大事ではないかと考える。